

小関三英に關する覺書

——書翰と文典断片（新資料）——

杉 本 つ と む

内 容

はじめに 小関三英と『弘采録』 三英と語学力 三英の第一
回出府の考証（文化十一年ごろ） 三英と古雄權之助 文典断
片と『英文鑑』 三英とモリソン字典 わが国最初の三英によ
る英文典 小関は Koebe である

はじめに 三英の資料を求めて、鶴岡市と酒田市に遊んだが、そ
の折、鶴岡市立図書館と酒田の光丘図書館で若干の資料を見るを
得た。一つは三英の書翰約五十通と、郷土史家・阿部正己氏の収
集された資料、他は光丘文庫に蔵されている『弘采録』（百三十
九卷）である。特に後者は、同じく同館所蔵の『病間雜抄』（七十
二卷）と合わせれば、二百十余巻にも及ぶもので、平賀源内に関
する記述や山口行斎についての記録など貴重なものが多い。早く
森統三先生がこの大きな資料の一部を紹介されているが、小論で
扱うものは、まだ御紹介にはなっていないようである。いわゆる
〈蛭社の獄〉の立役者として、高野長英や渡辺華山のことは、か
なり調査研究されている。しかしむしろ尚齒会のブレインであつ

た小関三英のことは、その姓の読み方（名乗り）さえ明確にされ
ていないのである。江戸時代に出版の著者別書籍目録にも⑨のと
ころに小関三英が出ているから、巷間一般には、あるいはラゼ
（セ）キサンエイと呼んだのかも知れない。それらをふくめて、今
回の資料探訪の報告と早大所蔵の資料を紹介することとしたい。

1

小関三英と『弘采録』 おそらく小関三英の伝記資料として、池
田玄斎^註の『弘采録』と『病間雜抄』とはきわめて貴重な資料とい
うことができよう。これに優るとも劣らぬものが、残されている
三英の書翰である。もともと『弘采録』に見られる三英に関する
記録は、古く佐藤古夢氏などが御覧になられ、さらにひろく且つ
多くの資料を阿部正己氏が紹介しておられる。山川章太郎氏の論
考〈小関三英とその書翰〉も、阿部氏の資料・草稿によっている
と思われる。私もあらためて、『弘采録』に三英資料の記事をさ
がした。たとえば三英が弁助と言われたころの唯一の書翰と目さ
れるもの（『弘采録巻三十』）の中で、新井白蛾を〈白蝶〉として

いるが、これを訂正することでもできた。これは阿部氏、したがって山川氏も誤読しているもので、現物をみるとまさしく、玄齋自身きちんと「白蛾」と書いて誤っていないのである。これはほんの一例にすぎないが、書翰をふくめて、読みあやまりがあり、やはり再検討は必要であった。なお三英の直接資料ではないが、阿部氏と山川氏との往復書翰なども拝見することができ、山川氏の論文作製が阿部氏のものによっていることの事情もかなり明確に知ることができたのである。また郷土史家の収集研究されている資料——例えば明治初年まで小関三英の末流とも言うべき人が酒田市で代言人をしており、伝わる資料も所蔵されていたこと。それを写されたものなど——も拝見することができた。小論では、紙数の関係もあるので、文政十一年六月十日付の書翰一通をとりあげ、それを中心に、従来、未詳とされた点や新しく考えられるところを述べて、大方の叱正を仰ぐものである。

三英とその語学力 おそらく三英の語学力のすぐれていたことを証するものは、つぎの書翰であらう。

◇文政十一年六月十日付

一筆啓上仕候 甚暑之節に御座候得共 皆々様益御機嫌能可被遊御座奉恐悦候 (中略) 私義三月中々足痛にて必至と平臥罷在候処此節稍近所步行相成申候 尚追々快方に御座候間乍憚御休意可被成下候 右に付御屋敷にも一向出入不仕候 扱又蘭書は追々珍敷もの相渡り申候に付 此節専ら披見に相かゝり居申候 去年已来学文も大に上達仕候 又々蘭文相認め先頃権之介先生被来候節 監定お得候処大に称美被致候

当時は権之介先生門人之中にも老阿輩上達之人有之候由 就中岡賢介と申は尤拔群に而吉雄忠次郎にも相勝候由権之介先生被相咄候 右岡賢介と申は承候処格別之人物之由に御座候 老兩年中には此人も出府可被致候由に付 何卒面会致度相待居申候 外には天下中六七人はよく読候人も有之候へ共 何れも同志に無之候 天文臺も明後年は交代年に御座候間 誰ぞ長崎へ別人參可申と存候 左候へは是も又一変可仕存候 諸候に而も蘭学を真に好候人は一人も無之候 只医術而己を取用候はまゝ有之候 仙台のことく蘭学を別に興候人は無之候 米藩も一向論に不足候 猶我大夫山住氏が如くに而候何方も一般之風俗にて 門戸お大に不仕候へは門人に相成候ものも無之候 兎角あり元お見申候は天下一統之悪俗に御座候 依之此間に見識お相定め申候而 世俗に相構不申自分一己之学文仕候事に相決申候 名利は何程求め候而も是迄得候例無之候間 透と相明らめ候而求めざる事に相決申候 是に而生涯お送候とさへ存候へは不苦存候 御地之出生之ものに野村周徳と申もの 当時青山侯の近医に相成湊杯の同役に相成り居り申候 如是者に御座候間何程学文有之候而も名利之益には相成不申ものに御座候 是ハ天下一統皆如是ものに御座候間被是相識候も無益と存候 田舎に來り候へは少々利益之口も有之候へ共 是又学文之障りに相成候間延引仕候 当時蘭学お致候人之主意は何れも名利お重と仕候事に御座候所私杯之同意には無之候 第一翻訳を業と致候人は夫に而金お設け候ために仕候 又医術を学候人は夫に而世俗に用られ望お

候ために致候事に御座候間 孔子之所謂君子之道に相返候事に御座候 依之私杯之する所は同蘭学致候人之目々見候而も相分り不申候 桂川様には未だ見合引移不申候 此仁は君子小人之分ちは屹度相知候人に御座候 勿論蘭学者の目利も出来候人に御座候間 私杯之胸中は得に御見取被成下候事に御座候 乍去此人も金銀之助けには一向相成不申候 学文之助けには大に相成候人に御座候間 不懈相仕居申候 外には是と思ふ人物にも往達不申候 中山良輔父子此間出府致候由に而私方に相尋参申候 桂川様にも参候由に御座候 私には往達に而いまだ面会不申候 先是右暑中御伺申上度は如に御座候 猶期後育之時候 恐惶謹言

六月十日

小関 三栄

小関友之輔様

参人々御中 * 追伸は省略

文政十一年と言えは、この十月に例のシールボルト事件が発生しているわけであるが、三英自身にとって、生活の上できわめて困難な時だったとされる。書翰はこのことも充分語っているといえよう。しかしこの中で、へ去年己来学文も大に上達仕候 又々蘭文相認め先頃権之介先生被来候節鑑定お得候処大に称美被致候」というところが注目される。まず「へ去年己来」であるが、去年という文政十年は、三英が何処でどうしていたか明確ではない。すくなくとも、山川氏の推定されている文政十年八月廿五日付の書翰（これは書翰裏面へ亥八月廿五日）を文政十年とされたのである）によれば、文政十年六月九日母死没後、鶴岡をたつて、山形――

仙台経由で江戸に再び出ようとしている。そして山形でしたためたものがこの八月廿五日付の書翰である。この書翰を山形でしためたことは文面でわかるし、「江戸へ着の上差上候様可仕候」といい、「江戸へは来月廿日頃の着に相成可申と存候」という文面からすれば、江戸へ行く目的のあったことも諒承できる。しかし反面、三英が鶴岡を出るにあたつて、仙台での医学修業を願ひ出ている点――「仙台へ医学為修業罷越候処又々修行之筋有之同所直に御当地へ罷出申候」とある――はうなづけない。彼自身既に文政六年十月には招聘されて、仙台医学校の教官になっているのである。人に蘭学（主として語学か）を教えるほどの人物が、再び元自分が教師をしていた仙台へ、医学修業というのはおかしい話である。とするとこの書翰を文政十年とするのは誤りかとも思われよう。しかし、やはり書翰中に「佐々木中沢方へは相尋不申医学校に而心安く仕候方には何れも隠れ分に」と述べているから、三英が仙台医学校の教官をした後であることも確かであろう。とすれば、やはり文政十年は正しく、この書翰は何か文面以外の真実が語られているようである。話は別であるが、森鷗外や西周のことを調査に津和野へ探訪に行った際も、彼らが忠実な藩の子弟ではなく、むしろ反藩体制の人間であり、そうした組織からははみ出している人間たちであることを知った。おそらく青雲の志ある三英も、藩ではきわめて低い下積み生活の人間として、脱藩・離藩を合法的に、計画していたことも推測される。従来も三英についてこの文政十年前後（前後というより、八・九・十年のころ）は注目すべき時期であり、空白期なのである。なお佐々

木中沢について一言述べておきたい。『磐水存響』の年譜に「文化十二年 一ノ関 佐々木養三 入門」とあって、彼二十五歳の時大槻に入門している。この文化十二年から約七年間江戸で蘭学修行をしている。蘭語は馬場佐十郎などに学んだようであるが、文政五年に仙台医学校の教官となるまでみっちり蘭学を勉強したことになる。中沢と江戸蘭学者との交渉は繁く、多くの書翰が現存している。従来、小関三英が文化のはじめ、江戸に出て吉田長淑や馬場佐十郎に学んだとされているが、これも疑惑だらけであり（事実、馬場に関していえば、彼は文化五年以降でなければ江戸に在住していないし、他の小関の書翰から、私は小関が馬場に直接蘭語学を習ったことを否定したい）むしろ仙台医学校や、中沢との関係からすると——中沢から三英に対して数回にわたって医学校教官の交渉がある（書翰による）。これは両者の関係がこの交渉で生じたというより、あるいは、江戸で知り合ったのかも知れない。特に桂川甫謙^{（註7）}が、中沢と三英を仙台に推薦したとなると、三英の江戸在住も人間関係から間接的に証明されようか。文化のはじめというより文政のはじめではなかったか。後述のように三英の語学力、特に蘭作文にすぐれているという点からは、吉雄権之助との出逢いも大切であろうが、現在まではほとんど考察らしい考察のない「吉田長淑」について、是非とも考究すべきと思う。吉田の実力は、桂川直伝とて、かなりなところまで達していたと思う。ともあれ従来の説に立っても、馬場は文政五年には死没してしまっており、中沢は文化十二年に江戸に出て来たとする、文化十二年から文政四年の間に、三英の江戸での蘭学修行と

中沢との交渉が生じたのではあるまいか（後述）。三英が文政五年には鶴岡に居たことが、書翰では明確であるから。ただこの文政五年以前のもので、明確に江戸在住を証拠だてるものはただづきに考察する『弘采録』だけと言える。三英が中沢との面会をさせたのは、単に三英の方に何かがあった（山川氏説）というだけではなく、中沢の方に、例の文政五年仙台郊外、七北田での解剖とその報告ともいふべき『存真図版』事件があった故であろう。仙台における漢蘭の対立は三英にとって、不必要な摩擦であり、避けられれば避けたい気持があったと思う。

2

さて「去年」云々が意外に横道にそれてしまったが、三英が何故去年以来の向上を述べているのか、いささか理解に苦しむところである。むしろ、おちついて勉強する暇には乏しかったと思われる。ここで三英の江戸在住を証する現在唯一の資料を『弘采録二〇』から抜出しておこう。つぎのものである。

東都の学者は孰も宋学に御座候此間木下一斎と申儒生の会に出候人の咄に承候に此人斗は宋学に無之由此木下は則葛山寿か事也と申聞候才孝君の碑など書候人孟孝君杯尔御尋被成候は、相知可申候一斎か著述論語一貫と申もの一見仕候山子か説を体にいたし己か説にて補ひ候ものに御座候

此間加州の藩中新井真蔵と申人と致対話候は白蛾か実孫にて当時聖堂に遊学いたし居候^{（註8）}因斎兼て被下候馬場喜十郎が事共尋候処到て入魂の由申候被仰下候通豪傑に御座候由承候今

は何某とやら候養子に参候故馬場性^{（きやう）}をは名のり不申候由扱當時聖堂にての嘴矢は古河弘の由是は親弥介に一陪まさり候才子の由と右真藏咄され候間に御座候北山か二代山本良助と申者詩ヲ能作り書も出来候男のよし塾中に懇意のもの有之度々参申候扱田舎にて豪傑と承り候者も逢見候得は張合も無之ものに御座候田舎には却て豪傑も可有之奉存候已上

五月三日

小関 辨助

高橋玄甫様

右は三英の書翰を玄齋が書写しておいたものであるが、文中、東都の学者が誰も彼も宋学であるというのは、いわゆる寛政の異学の禁以降の江戸学界の状況を記述していることとなる。ただ〈木下一齋（葛山寿）や古河弘・同弥介については必ずしもまだ解明されていない。特に木下一齋に関して。ここで一おう考究しておこう。一体小関三英のものには、誤字、宛字かなづかいの誤り、いい加減さが多いようである。そのうえ『弘采録』は三英書翰の写しであるから、一そうずれがでてこよう。この木下一齋はどうもこれに適當する人物が見出せない。山川氏の論文発表以来、約三十年、いまだに正解が出ていないのである。しかし結論的にいうと、三英のくせで、松を木としてしまったのではないかと思う。私はそう推定して松下一齋なる人物を求めてみた。調べてみると、まさしく適當な漢学者が見つかったのである。すなわち、木下一齋とは松下一齋のことで、例によって三英（あるいは池田玄齋）の書写の誤りであった。『近世漢学者^{（伝記）}著作大事典^{（附系譜）}』の〈松下葵岡（古注学）〉につきのようにある。

名は寿字は子福、清太郎と称し、葵岡、又一齋と号す、文事には葛山氏と称す。松下烏石の姪なり、江戸の人、家世々幕府に仕ふ。葵岡業を片山兼山に受け、兼山の没後は其子弟を誘掖し、其学統を受く。之を以て世に唱ふること、四十年一日の如し。山子学と称して今に存するは、実に葵岡の功多きに居る。其の平生の言行甚だ古人の風あり。文政六年十二月十三日没す、年七十六 著述 論語一貫十卷刊（片山兼山 説）

右で文政六年以前、三英が江戸にいたことも推定できる。つきに關連して一齋の著『論語一貫』の刊行を考えてみよう。三英が〈一見仕候〉と述べているところを見ると、同書刊行の時点、あるいはそれ以後、江戸にいたことは確かであろう。同書は、文化九年序、文化十一年刊の五卷五冊本である（上の十卷刊というのは誤）。やはり三英が述べているように、〈山子〉すなわち〈片山兼山（古注学）〉の説によっているものである。文化十一年刊行であるから、三英がこれを読んだのも、これ以降であり、したがって江戸居住がこのころか、それ以降であったことも確かであろう。従来、三英の江戸居住の時が明確ではない。これで文化十一年ごろに（文政四年以前）江戸にいたことと、彼が多少とも儒学に身を入れたことがわかる。そして消極的な意味で、蘭学には専心していなかったのではなからうか。さらに古河弘や弥介のこととがでてくることからわかる。後者はかの有名な古賀精里（弥助）であり、前者はその三男・古賀侗庵のことと思われる。例によって古河は古賀であり、弘は侗庵の名としては他に見えぬが

〈聖堂にての嘯矢〉などから、文化六年二月二十四日、聖堂に儒者見習となった伺庵（煜）と考えるのが妥当しているようである。さらに北山は文化九年五月十八日に死没し、二代の山本良助（良も亮が正しい）のことを考慮すると、ともかく文化十一年前後には江戸におり、これ以降文政四年ぐらいまでは、鶴岡を離れていたのではなからうか。年令的には二十歳の半から十年ほどである。別に出てくる桂川甫謙・甫賢のことを考えると、おそらく江戸居住中にでも、親しくなったのではないかと思う。桂川が蘭学者の庇護者であることは言うをまつまい。従来、三英が馬場佐十郎に就いたとするのも、あるいは桂川をとおして、紹介され、知り合った程度のことかと思う。馬場に直接ではなくて。ともあれ文政十一年現在では、既に甫謙は死去し、甫賢が三十二歳で、ちょうど三英より十歳年下である。

つぎに〈先頃権之介先生被来候節監定お得処大に称美被致候〉の点である。権之介は吉雄権之助のことで、馬場とともに中野柳圃の高弟である。当代随一の蘭学者であり、シーボルトがわが友として高く評価している長崎通詞である。ただし日本人の記述したものには、必ずしも権之助について高く評価を与えたものは多くないのである。江戸蘭学界では決して先生などとは敬称していない。三英は文政十一年四月朔日の書翰でも「此間は長崎吉雄権之介ナル大先生出府致居候、折々面会仕候今一兩日逗留之様に御座候」と最大級の敬称で書き送っているのである。この言いぶりでも、三英がこれ以前に長崎に留学してないことがわかる。権之助が蘭會話に秀れていたことは定評があるが、その評価ほどに

は、彼の文法論というか、著述が残されていない。わずかに『属文錦囊』があるのみである。同書については、蘭学研究会で発表しておいたのでその方を参照されたい。権之助の弟子は高野長英といい、岡研介といい、その他多士済済で、シーボルトの弟子がそのまま実質的に語学的には権之助の弟子であった。彼が後にシーボルト事件に連坐してしまいが、直接間接に江戸の蘭学界にも影響を及ぼしている。例えば宇田川榕庵における権之助蘭語学の見事な結果がそれを証する。そしてこの十一年六月十日で、その大先生に自己の蘭文を見せて、大いに褒められ得意になっているのである。時に三英は四十二歳で権之助の方が二歳年上である。岡賢介も研介が正しいが、当時三十歳、新進気鋭の蘭学者として、シーボルトの鳴滝塾の最初の塾長をつとめている。坪井信道伊藤圭介の語る研介は最高のものであり、よく言われていることは〈説書力は長英が研介に勝り、文章會話は研介が長英に優れたり〉であった。私が萩の郷土史家・田中助一氏から岡研介（山口県出身）の書翰のことを聞きその中で、研介が吉雄俊蔵（名古屋蘭語学の祖蘭語学に秀れていた）は評判ほどすぐれたものではないと評しているをお聞きした。もしこれが真であれば、岡研介の自信はたいしたものであり、裏返すとそれほど実力があつたことにならう。手紙の中で〈就中岡賢介と申は无拔群〉の評語も肯づけよう。また吉雄忠次郎は吉雄呉洲のことで、文政五年、馬場の死没後、幕府に召された長崎通詞である。宇田川榕庵の自叙年譜にも〈両雄〉として、如淵と並んで蘭語学の大家と記述している。つぎの文政十一年七月十三日付書翰でも〈蘭学も追々盛行ニ

御座候へ共指たる人物も無御座候 当時崎陽に罷在候岡賢介と申は格別之人物之由に御座候——扱除之は取るに不足候」と書いてゐる。三英が如何に自己の蘭語學に自信をもっていたことが証明できよう。つぎに示すのは『弘采録九四』の一部である。三英が蘭學者として自他ともに許していたことが証明されよう。

(三英の蘭語熟達ぶりについて) その一ツをいはず先の中山道輔(同じ藩のもの)より持伝へたる蘭書一卷あり、莊内にて誰もよみ得る者なく、近來物故せし良輔も実は一向よめされとも、能く読み得る体にもてなし、秘書と号して深くひめ置つるに、この貞橋(三英のこと)が事を聞てひそかに招きて、右の蘭書を出しよませ試るに、同然のものにて蘭書の中に於ては、いと読み易き事なるものをとて、水の流るゝことくよみ下す。扱その中に鹿と鶴の如き鳥海岸の湖水に入りて居る図あり、良輔いかなる因縁なるそと問ふに、貞橋そは鹿も鶴も矢疵を得て潮に浴すさま也、扱金創等は外科薬斗にて、内薬に及はざるを譬喩せる事といふ。其外奇説異聞人願を解しむ。良輔大に感じ何卒御国の宝とせまほしきといへりしか共、時運の至らざる処は、人力の及かたきものにて、終に南上して他家の臣となれり。

文中の「南上」が天保三年の岸和田藩への仕官を指すのかも知れない。したがって右の逸話は、文政五年(または文政十一年)ごろ、彼が一たん江戸から帰郷した折か江戸表のこととなるろう。時運の至らざる処が、三英にどれほどの苦痛を与えたことか。権之助との出会いは、山川氏も言うごとく三英の長崎行を否定

する一材料ともなろう。ただ三英が、文政十年八月廿五日付の書翰で「先は江戸へ罷越候はゞ本石町武丁目湊長安処へ寓居と存候」とあるから、湊長安とは親しかったわけである。長安とどうして親しいかを検討すると——長安は石ノ巻の対岸湊千軒村の人——単に郷土の關係からではなく、長安が吉田長淑の学僕となっていたからと思われる。やはり既に三英と文化年間、すなわち三英の第一回の江戸居住中に親交を結んだのであろう。長安がシールボルトの門に入つたことは『丹靖堂隨筆』でもうかがえるから真であらう。このことから、三英もシールボルトの門人などと誤伝されたのではなからうか。長安の第一回江戸在住を追究していくと、あるいは三英の第一回江戸在住も明確になるかも知れない。

3

文典断片と『英文鑑』 ここで新資料として、小関三英の語学力を知ることのできる資料を紹介してみよう。実は資料というには余りにもすくなく、断片三葉にすぎず、彼自身の語学力を知るにはきわめて不足している。しかし現存のものとしては唯一とも思われるのである。この断片も二つに分けられる。ここでは、その一つ、〈文法用語の一覧(断片)〉を紹介してみる。

1. Lidwoorden 冠辭
bepalende lidwoord 指実冠辭 モリソンニ拠ル
onbepalende lidwoord 不指実冠辭 同上
2. zelfstandige Naamwoorden 名目辭 同上

- getallen 二 貳 Enkelvoud 單員 Meervoud 疊員
 geslachten 三 陸 mannelijk 陽性
 vrouwelijk 陰性 onzijdig 中性
 naanvallen 四 陸 eerste 第一 二 二 tweede 第二 二 二
 derde 第三 二 二 vierde 第四 二 二
 3. Bijvoeglijk naamwoord 添名辭
 trappen 三 陸 stellig 平等 vergelijkende 較等
 overtreffende 優等
 4. Voornaamwoorden 指名辭
 Persoonlijk voornaamwoord 称呼指辭
 personen 三 二 eerste 第一位
 (t)weede 第二 二 derde 第三 二
 wederkerige voornaamwoord 反己指辭
 bezittelijk voornaamwoord 連名指辭
 vragende voornaamwoord 問指辭
 aanwijzende voornaamwoord 示指辭
 betrekkelijk voornaamwoord 承接指辭
 5. Werkwoorden 動辭
 gelijk vloeiende 不換音動辭
 ongelijk vloeiende 換音動辭
 ongelmaatige 拗格動辭 bedrijvende 能動辭
 lijdende 所動代 onzijdige 自動辭
 wederkerige 反己動辭 hulpwoord 助辭
 deelwoord 分類辭

- wijzen 四 様
 aantoonende 明説様 aanvoegende 未定様
 gebiedende 吩咐様 モリシムニ 様 onleparaade 寛説様 同上
 Tijden 六 時 tegenwoordig 現在
 onvolmaakt verledene 過了現在
 Volmaakt verledene 過去
 meer dan volmaakt verledene 過了過去
 eerste toekomende 未来
 tweede toekomende 過了未来
 6. Telwoorden 数辭
 7. Bijwoorden 添旁辭 モリシムニ 様
 8. Voorzetsels 置先辭 同上
 9. Voegenwoorden 連句辭 同上
 10. Tusschenwerpsels 歎辭 同上
 一見してわかるように、品詞を主とした訳語であるが、訳語の点から考慮すると、江戸の蘭学界や長崎の通詞たちの用いるものと著しい相違がある。たとえば文章体 (wijze) の《四種》であるが、《明説様・未定様・吩咐様・寛説様》は、中野柳圃・馬場佐十郎、吉雄権之助のものとも異なる。現時点では他にまったく共通の訳語が見られなかった。つぎに若干の訳語について、指摘しておくようなものである。
- 冠辭 (訳鍵・和蘭文学問答・蘭学梯航など) / 陽・陰・中性
 (蘭学生前父・蘭語冠履辞考など) / 名目辭 (蘭語冠履辞考・訳鍵・蘭学逕など) / 單員・疊員 (六格前篇・蘭学凡) / 指名

辞(蘭学凡)／動辞(蘭語冠履辞)

右のように藤林普山のもの、馬場佐十郎のもの、中野柳圃のもの、吉雄権之助—吉雄俊蔵—大槻玄幹のもの、などと類似のものがみとめられる。しかし「單・覺」は、吉雄俊蔵の『六格前篇』と関連あるが、他にこの訳語を用いているものが皆無であつて、三英が権之助と関係あつたことの一証拠にすることも断定しにくい。吉雄俊蔵の文法は権之助から流れているからあるいは権之助のものが、三英にも流れていると考えられるのである。が、「指名辞」というのもこの線で考えられるようではある。しかしそれにしては「冠辞」などがなく、『蘭学凡』などでは「弁声詞」などと訳している。結論的にいうと、ある文法訳語についてのみ、ある文典と一致するということで、全体的には、何の共通性もなく、既成のものとの比較では、ばらばらと断言してよさそうである。現代も用いている「中・男・女性」も、蘭文典はなかなか用いられず、『和蘭語法解』(文化十^{二年刊})で「中性言・男性言・女性言」はあるが、それとごく近いと思われる「言」の省略された「中性」などの訳語が出てこないのである。「歎辞」などにしても同様である。ただしここでも一つだけ注目すべきものがある。すなわち天保十一年の『英文鑑』で、それをみるとつぎのようである。

Articles, lidwoorden 冠辞, Definite Articles, Bepalende lidwoorden 指実冠辞, Indefinite Articles, Onbepalende lidwoorden 不指実冠辞/The number, het getal 二、singular, het enkelvoud 単、plural, het meervoud 衆

凡/The gender, het geslacht 三性, The masculine, het mannelijk 陽性, The feminine, het vrouwelijk 陰性, The neuter, het onzijdig 中性/Substantives or Nouns, Zelfstandige Naamwoorden 名目辞/Adjectives, Bijvoegelijke Naamwoorden 添名辞/Verbs, Werkwoorden 動辞/Pronouns, Voornaamwoorden 指名辞/Adverbs, Bijwoorden 添辞辞/Conjunctions, Voegwoorden 連句辞/Interjections, Tusschenwerpsels 歎辞

右のような両者の一致は偶然とは考えられない。『英文鑑』の完成したのは天保十一年(序文は十月)で、訳者は(浜川六蔵訳述、藤井質訂補)であつた。六蔵は、巻首にあるように天文方見習浜川敬直訳述であつて、父は有名な高橋景保の弟、景佑である。したがつて、六蔵は間接的には馬場佐十郎及びその弟子などを師として蘭語を学習したであらう。もし小関三英が馬場について学習したということが事実ならば、三者の共通性もつとあつてもよからう。もっとも父景佑も蘭語は精通していたと思われるので、父からも学習したであらう。(しかしこの場合も六蔵自身から出ているとは限らない)今後一そう考究すべき人物である。これよりもむしろ、上述のように『英文鑑』と三英のものとの一致はやはりただごとではないと思う。しかも三英のものが、すくなくとも『英文鑑』以前である点は明かであるから、三英の訳語が六蔵に影響を及ぼしていると推断してよからう。このころ三英は幕府天文台の翻訳方に出仕して、六蔵らとも交渉をもつたと推測することは容易である。つぎにこの六蔵と三英との関係を「英語」を

仲介して考えた。上掲の文法用語を見ても <bepalende lid-wood 指美(漢語)ヤリ(漢語)ニ(漢語)——の(ヤリ(漢語))>が証拠となる。このヤリ(漢語)は、*ヤリ* *ヤリ* *R. Morrison* の『Dictionary of the Chinese Language, Macao 1815~1823, 6巻』のヤリ(漢語)語彙で、その第二巻目が英華対訳字書になっているが、同書は文化十二年から文政六年にかけて出版されたもので、文政八年(一八二五)にシーボルトの助手として長崎にやってくる来た外科医の Burgher などを持参したものである。R・ヤリ(漢語)の『Memoirs of the life and labours』の一八二八年の二十八日・二十九日の二日間の記事で、そのヤリ(漢語)のヤリ(漢語)である。

“28th. — Mr. Burgher called and told me a great deal about Japan and the neighbouring islands. I have invited him to the Company's, as you will see by the enclosed. He says the Japanese write on their fans, at Nagasaki, extracts from Morrison's Dictionary, arranged according to the Alphabet, as an ornament, and present them to each other! The Alphabetic arrangement is new to them. Majoribanks was much struck with the circumstance of the Japanese getting a new Chinese Dictionary through English language.”

“29th. — I have sent to Japan an order for a copy of my Dictionary, to be given to the translator Gonoski Kokizaa.* Mr. Burgher suggests that I should write a kind letter to him, and he will forward it. I have given

Burgher also an order for a copy of the Dictionary, and thirty-two dollars, worth of Chinese books and prints.”
(1823年12月)
(28日・29日)

* Gonoski Kokizaa は権之助吉雄である。さらに Henri Cordier の “Bibliotheca Sinica / Dictionnaire Bibliographique / Des ouvrages relatifs à L'Empire chinois” の巻3に、Mr. Burgher が Morrison を訪問して、つぎのように述べたことを伝えている。すなわち、

“Nov. 18th. (中略) He told me a piece of news which I cannot help communicating to you — it is this — the Japanese translators are sending Morrison's Dictionary into the Japanese language! This is a curious and interesting fact (後略)” (1728年11月18日、上述のモリソン)
(この日記から抜粋のものである)

** 1828年は日本の文政11年にあたる。ちょうど2年前権之助は江戸参府に参加して、江戸にやってくるらしい。

右のヤリ(漢語)ヤリ(漢語)字典は吉雄権之助と深い関係があり、文政十一年六月の三英と権之助の出会いには、あるいは権之助を通して三英がモリソン字典を手に入れ、訳語においてこの影響を受けたかもしれない。権之助のそれ(もしあれば、英華からの訳語)を受けとめる機会も得たであろう。あるいはまた、三英と友人になった高野長英が権之助の弟子であったから、権之助—長英—三英という流れで、受けとめられたかも知れない。一か所のみでなく、モリソンニ掬ル(く)が九か所もあるから、かなり参考にしたことがわかる。モリソンの英華々英字典の何版かの、中国語訳が

三英に用いられ、さらに『英文鑑』に受けつがれたと考える公算が一番大きいであろう。モリソンのものといえば、他に華英字典である『五車韻府』があり、これも、蘭学者にかなり利用されていたらしい。宇田川榕庵なども翻訳の時これを用いていたことが彼の訳書とおして、充分うかがえるのである。

4

さて三英がモリソンの字典を用いたとするのは決定的であるから、従来知られていなかった彼の語学力の一面——すなわち英語も手がけていたことを知るのである。権之助が英語を手がけていたことは既に知られているが、馬場もまた英語を手がけていたことは現在の彼の作品『許可諸厄利亜語集成草稿』でも証明できる。しかし他の蘭学者の場合は、英語をどの程度手がけたかが知られていない（長崎通詞はのぞく）。一おうすなおに考えていけば、やはりこの文法用語をとおして、つぎのことがわかる。①三英が権之助と交渉をもち、彼などをとおして、英語関係の書に接したらしいこと。②三英が英語にも通じていたらしいこと。③さらに『英文鑑』及びその訳編者と深い関係のあるらしいこと（これは三英の天文台出仕とも関係あろう）。従来『英文鑑』がモリソン字典との関係で、特に訳語について論じられることはなかった（荒木氏のもの及び大阪女子大『日本英学資料解題』でもふれていない）し、小関三英との関係もまったく考えられていない。そこで荒木伊兵衛氏がつぎのように解説されているのは再考を要しよう。すなわちつぎのことである。

即ち英艦が屢々東海に出没して、我国に水薪炭を乞ふ者が出来て来たので自然英語の必要を感じるやうになつた。そこで幕府は天文方である渋川六蔵をしてその研究に当らしめた。しかし先に長崎に於て編纂された「小笠」「大成」等は只単語単句を集めたのみにてその文法を知る上に於て不便を感じたので、今度英文法書の翻訳を思立ち本書が完成されるに至つたのである。蓋し英文法書として本書は本邦に於ける最初の著述であるが江戸に於ける英語学研究は長崎よりも凡そ三十年許り後れてゐた。

右の解説は果して正しいだろうか。上掲三英のものは、わずか三葉の断片であり、文法関係はそのうち二葉で上掲のものだけである。それも直接英文法関係でなく、『英文鑑』自体『L. Murray の『English Grammar』の蘭訳本『Engelsche Spraakkunst』F. M. Cowanである）モリソン字典を通しての推測にすぎないが、今後小関三英を考える上に充分考慮すべき問題をほらんでいると言つてよからう。今後の資料探訪を必要とするものの、三英こそ英文典翻訳の最初の蘭学者と仮定していいのではなからうか。このころ三英を三英と改名したのも、単なる偶然だろうか。

5

小関は *Kosel* といふをもつてここに小関の呼称について一考しておく。鶴岡市市立図書館元館長大瀬欽哉氏の御教示では、庄内地方ではコセキと呼び、羽黒山麓手向では、現在もコセキと呼ぶ人びとがいるという。佐藤古夢氏の資料中に、小関の子孫の方

が明治初年に御健在で、コセキと自称されたこと、小関三英伝(草稿)をまとめられた阿部正己氏は小関のシーボルト門人帳に Sanai Kozeki とあるから、やはりコセキが正しいとされ、氏の編集に成る『庄内人名辞典』の架蔵本では、はじめラゼキとされたが、朱でコセキとされていること(いずれも市立図書館にて現物調査)。しかし江戸時代の出版物で、ラゼキとラの項目に編集されていることや、積極的に——上述の阿部氏のローマ字署名からの断定も、小関が現代ではシーボルトに入門したことが否定されているし、署名の仕方に私見では疑問がある——コセキがラゼキかを決定するものがない。ただ上述のように、庄内地方ではコセキであることは、小関自身もコセキと名乗ったことを推定させる。ただ江戸とか他地方の人は言いにくいこともあってラゼキと呼び、自からも強く否定もしなかったであろう。ところが、上述の早大に所蔵の断片の他方には、〈Koseki Sanji, K.S. Saneai, K.S. Saneai〉とあり、ロセキサンエイ、あるいはコセキサンネイ(サネイがサンエイかどちらとも読める)と読める。ローマ字書きであり、筆蹟からは自筆とも思われるので、やはりラゼキにあらずしてコセキであったと思われる。従来明確ではなかったが、これをもって確証とし、今後コセキと呼ぶべきかと思う。

最後に三英の人為り、対学問態度であるが、幼時から焼じによりびっこになったというハンディキャップ(足痛もそれである)もあり、その性格にもよるうが、きわめて地味であり、ケレン味のない学究肌の人物と思われる。世間の風潮や学者が金もうけや名利のために働く姿は君子之道に反するものと言ひ、桂川にもそ

うした学問・学者の真の庇護者であることを期待もし希望もしていたようである。おそらくこのころは三英の蘭語学の實力は上位にランクされるものであろうし、反面、たいして学問實力のないのに栄達の門が開け、立身出世しているものもあることも承知していた。それも時運であり、人の運命は学問とは別であることも悟ってはいたであらう(内心では無念にも思つたろうが)。しかしやはり田舎では学問ができないこと、そして(世俗に相構不申自分一己之学文仕候事に相決申候)と断言し、当時としては、まれにみる表現としていいほど、学問のための学問、真摯な学究の徒としての姿勢と努力を語る三英であった。これは『弘采録』に〈三英は私欲などはいたす可き性質にあらず、貨財には甚うとき男、此方に居たる中など、大窮せしかとも自若として唯酒を嗜み書を読むの外なし〉と記録しているのと同じである。しかし文政十一年から四年ほどで、天保三年(四十)一月十五日岸和田藩に召し抱えられ、江戸赤坂溜池山王隣藩侯長屋に住み、給人格、七人扶持金五両を給される身分となる。これは大変よろこんでいる三英でもある。さらに三年後、銀十枚を給せられ、幕府天文台の蘭書翻訳方を命ぜられる。蘭学者として最高の地位であり、この年天保六年(三十八)に、三英を〈三英〉と改めるのである。

例によつて幼時から天才のように評され、その風貌が蘭人に似ているところからカピタンとあだ名されたともいう(『弘采録』)。屋根にのぼつて星を覗いたという逸話もある。しかし彼の大志と藩制とはついに彼を鶴岡から離れさせ、さらに自刃という非業の最後を上げさせることにもなるのである。わずかに一通の書翰なが

ら、たった断片二葉ではあるが、小論でとりあげたものは、三英を考へる上にきわめて重要な資料であることを失わぬと思う。

註1 雑誌「本道楽114〜118」(昭和十年・十一年)に五回にわたる紹介記事を連載。

2 池田玄斎は庄内藩士禄百石、嘉永五年(一八)七十八歳で死没。三十歳より翌になり、家督を弟にゆずつて、文事に親しんだ。酒田市光丘図書館所蔵。甲崎環氏により「弘采録目錄」が製作印刷にふされている。

3 雑誌「文化」(東北大・昭和十三年)に四回にわたる連載。

4 三英の書翰は文政十一年としているが、他に(A)文政十一年一月五日付、(B)四月朔日付の書翰があつて、(A)では(前略)当三月ハ長崎ハ吉雄權之助馬場為八郎と申通事兩人、献上登に出府被致候積に御座候(後略)とあり、(B)では(前略)此間は長崎ハ吉雄權之介ナル大先生出府致居候 折々面会仕候 今一兩日逗留之様に御座候(後略)とあつて、吉雄・馬場(為)が文政十一年三月には出府していることを知る。これを甲比丹の参府と比較すると、板沢武雄氏の調査では、文政元年(一八)に附添大通詞馬場為八郎と小通詞吉雄權之助が参府に同行しているが、それ以降、文政五年・天保元年と甲比丹の参府はあつても同行していない。無いというよりも、兩人ともシーボルト事件に連坐してしまつたわけである。したがつてこの兩人をろつての文政十一年の江戸出府は、甲比丹に同行したのではないと考へるか、あるいは、書翰自身を文政十一年でなく兩人出府にあわせると文政元年と

考へるべきであらう。しかし裏書きの「子六月十日」の子が、丙子とすると文化十三年になり、三英三十歳のころでかなり蘭語学にすぐれ、そうした結果、桂川(桂川甫謙で国宝であろう)などの推挙もあつて、文政五年に仙台医学校教官として招聘されるようになったと考へても自然である。しかし上述のように、仙台的の医学校のことや、天文台が明後年交代云々——これは『新撰洋学年表』の(文政十二年己丑)の条に(四月天文方山路弥左衛門^諸蘭書和解御用扱を命せらる又長崎通詞名村三次郎は吉雄忠次郎後役として天文台詰)とある。これをさすか——と書いているから、文化十三年だとあわぬように思われる。岡研介が吉雄門であることから文化年間は無理である。いずれにせよこの書翰は内容的にも重要なことがふくまれていて、やはり文政十一年と考へてよく、馬場為八郎と吉雄權之助兩人の出府は公的に特別な目的をもつてではなからう。——シーボルトが文政九年に参府しているの、それと関連しているか。ただ一般に毎年一度長崎から通詞が大名などから注文の洋書・器物を持って、出府するならわしとなつていたようであるから、これも単にその恒例の一つにすぎないと解し、特に意味づけは必要はあるまい。

5 阿部正己氏によると三英の祖先は小関兵部敏忠といい、羽州八沼城主岐師美作守敏義の子といい、九代目が小関仁一郎で三英の兄である。子孫は代々組外(足輕組の組外)で、通常郡代支配に属し会計を扱い、数学に長じていたという。身

分的にはきわめて低いと言うべきであらう。

6 小関家の所蔵にかかる三英碑文による。明治初年には所蔵されていたらしい(佐藤古夢・阿部正己両氏資料)。「文化」に転載されている。

7 五代目桂川国宝のこと。文政十年(61)には没し、六代目は甫賢国寧で、三英はこの人の世話にもなっている。

8 「蘭研報告24」(属文錦囊の考察—吉雄権之助の蘭語学—)を参照。

9 他の一つは、三英の蘭作文で、青砥藤綱の逸話を日本語から蘭語に翻訳したもののようである。

10 竹村覚氏『日本英学発達史』(研究社)に述べているように、『英文鑑』自体、その文法用語の訳語が当時の他の英学関係書と比較してもきわめて特異である。これは原語(蘭語)とも関連するわけで、その点、三英のものとの一致は、一そう両者の緊密性を語っている。

11 三英のものと『英文鑑』との関連は後日詳論するとして『英文鑑』の用語の特異性は渋川自身が「諸官運用名目訳字諸家各異今従其字義隠当者別举訳例以便参考」(凡例)と書いているのでも知られている。しかしひるがえって考えると渋川は水野忠邦に抜擢された一種の政治家で、学究の徒ではない。弘化二年(四八)三十五歳で死没すると、『英文鑑』の翻訳年は、三十歳前か三十歳そこそこであらう。天保十一

年(四八)は三十歳であり、天保二年(三八)に天文方見習となつて約十年である。その時点では、三英と比較できぬほど蘭文にも劣るし、英文はなおのことだつたと思う。三英は天保十年に五十三歳で自殺しているから、モリソン字典などの使用を考えれば、なおさら渋川が果して、政事の暇に『英文鑑』翻訳を仕遂げられたか大いに疑問である。渋川の立場からすれば天保十年のころは、例の蘭学取締りに関する意見書十か条を幕府に上申するなど、政治的にもかなり力があったであらうし、逆に三英などが個人的に翻訳することはどうであつたらうか。その上、三英の文法用法の蘭語(Lidwoorden, Bepalende, ……)と『英文鑑』とはきわめて一致し、可能な推定では『英文鑑』の元となつた蘭訳英文典、及びその文法用語を三英が訳したのが現在の断片であり、これは渋川のために訳してやったのではないかとさえ考えられるのである。その翻訳は、天文台出仕の天保六年(三八)ごろであらう。三英が特に語学・翻訳にすぐれていただけに、このことは必至であらう。

12 なお阿部正己氏『小関三英伝』・佐藤古夢氏『小関三英伝』は、三英の息子・高彦の伝記とともに、一本にまとめて、小生が補訂し出版の労をとらせていただいた。学問に地方・中央はない。同書の刊行により、小関三英研究は、さらに、深まっていくことと信ずる。